

から解き放つ」という革新性を有してきた（吉武 泰水『建築計画学への試み』鹿島出版会、1987年、98頁）。こうした、ある意味で子ども中心主義に立つ建築計画学の考え方が教育改革を主導し、教育実践にも少なからず影響を与えてきたことは否定できない。

本書でも、教員と生徒指導との関わりなど丁寧に調査、分析されており、子どもの実態と切り離して職員室のあり方が述べられているわけではない。その過程で、建築計画学において時に革新の対象として受け止められていた統合型職員室の独自の意義を再発見できたことも事実である。しかし、子ども、教員、学校を取り巻く環境が急激に変化する中で、変わらない教室、変わらない職員室、変わらない教育空間はこのままでよいのか気になるのである。例えば、小学校とは異なる中学校の教科担任制の今日的意義をどう捉え、それらを支える教育空間をどう計画したらよいのか、「教員の使い勝手」の重要性についての認識を前提に、改めて、職員室を含む学校の教育空間のあり方について、教員の教育行為をトータルに踏まえてご示唆いただきたいと思うのは、評者だけではない。

教員の視点と子どもの視点のどちらを優先させるかといえば、子どもの視点が優先されるかもしれないが、実際には二者択一的なものではない。オープンプランスクールとそうではない学校と教員の意識を調べてみると、「教師が授業しやすい」と「子どもにとって学習しやすい」ことは表裏一体ではなく、オープンプランスクールを実践している学校の教員のほうがいかにしたら子どもにとって学習しやすいかを具体的、実践的に考えていたという側面もある（拙稿「学校施設と教育活動——教師の学校施設観を中心に——」『日本教育経営学会紀要』第29号、1987年、133～147頁）。そんな教育営為の機微にも踏み込んでいただきたいのである。特色ある学校施設をもつ学校からの視点だけではなく、特色ある教育活動をしている学校の活動や子ども・教員の意識からトータルに教育行為を問うた時、中学校の職員室を含めた教育空間に革新の必要性はないのだろうか。本研究の今後の発展性に楽しみはつきない。

教育学分野で、こうした著作を紹介する機会は少ないであろうから各章の概要に紙数を割いたつもりだが、本書に掲載されている図表一つひとつ

に、全国津々浦々の学校の資料や教員の貴重な証言が詰まっており、概要紹介だけでは申し訳ないと思う労作である。元教師である筆者が自ら属していた学校や教員の教育活動の特質を建築計画学の手法を駆使してエスノグラフィックに見つめ直した所産といえる本書の内容は教育学研究においても示唆的である。多くの会員に一読を薦めたい。（九州大学出版会刊 2012年4月発行 B5判 186頁 本体価格6,200円）

小山 みづえ 著

『近代日本幼稚園教育実践史の研究』

高田 文子（白梅学園大学）

本書は2010年1月に上智大学より博士（教育学）の学位を授与された学位請求論文「近代日本の幼稚園における保育実践研究の展開」に加筆修正の上公刊されたものである。

筆者は、これまでの日本の幼児教育史研究が制度や思想分野を中心に進められてきており、保育実践に関する歴史研究、特に「保育者による保育内容・方法改革」を対象とした研究の層が薄いことを指摘する。その上で、「近代日本の幼稚園において保育者が制度や思想との相互作用のなかでいかなる保育実践を展開したのか」、また「その過程で保育内容・方法改革がいかに推進されたのかを具体的に検討すること」によって「近代日本の幼稚園における保育実践形態の特質とそこにみられる保育実践の原理や方法を明らかにすること」（8頁）を研究目的としている。

その際「保育現場の実践関係資料や教材、研究記録」を分析するとともに、「当時の幼稚園関係文献、教育学や心理学等の文献をも幅広く調査」し、「それらに対比的に検討する」ことによって「保育現場における思想や方法論の受容の実態と保育方法が再構成される過程」（9頁）を具体的に描き出すことをめざしている。

本書は、書名にある「近代」という括りで明治後期から昭和初期までを研究対象としながら、第Ⅰ部で「保育方法の改善」、第Ⅱ部で「保育内容改革」、第Ⅲ部で「保育カリキュラムと保育実践形態の確立」について取りあげた3部構成となっている。保育実践を検討する際のフレームとして、

方法、内容、カリキュラムという3方向からアプローチして理論化することによって研究目的に対する平面的ではない切り込みをめざしたものになっているといえよう。

各章ごとの構成と内容については、すでに『幼児教育史研究』（第7号、幼児教育史学会、2012年11月）において宍戸健夫氏が詳述されている。評者は、以下本研究によって新たにもたらされた知見について構成に沿って述べてみたいと思う。

第I部では、幼児の心理や発達への着目により、個別的・画一的な恩物中心の保育が「共同のかつ創造的な保育形態へと移行」（40頁）改善されていく過程を検討し、保育現場に密着した資料の精読によって以下のことを呈示している。

大阪市立愛珠幼稚園においては、「恩物の混用、随意工夫による活動、共同製作など」恩物教育の改善の方向性を具体的に示した東基吉の理論を「主体的に摂取」して、明治後期にかけて共同的な遊びに着目し、幼児の創造的活動を尊重するように工夫を加えながら保育実践を試みていた（第1章）こと。開智学校の附属幼稚園として創設された松本幼稚園では、同園の保姆たちが「明治30年代後半から児童心理学を受容して幼児研究を開始」し、それを基礎として玩具研究や童話研究にも取り組み、それによって「従来の形式的・画一的な保育を改善する契機となった」（第2章）こと。神戸市立神戸幼稚園では、大正期に心理学や「幼児教育の根本思想への理解」を深めながら、「幼児の発達に基づいて、小学校の先取りではない幼稚園教育独自の保育方法を追求する姿勢」（83頁）によって、科学的に体力増進、情操陶冶、「遊戲的興味」に基づく知育の発達をめざすなど従来の保育方法を改善する力になった（第3章）こと。何れも心理学を中心に幼児理解のための学問的知見を受容しながらそれまでの保育の在り方を省察して改善していったことが、明解な論理構成によって示されている。

第II部では、「保育現場で生み出された保育内容の特質を明らかにする」ために、「お話」、「遊戲」、「自然保育」という保育項目の内容に踏み込んだ検討を試みている。

とくに、第4章では東京女子高等師範学校附属幼稚園における保姆らの、幼児を心から楽しませ、豊かな感情育成を主眼とする「お話」観の受容や、大阪市立幼稚園における幼児に好まれるお話の研

究によって、大正期から昭和初期にかけて、従来の道徳的教訓性を重視してきた姿勢が見直され、幼児の心的欲求を満たす、その生活に密着した作品が選択、創作されていった様子が実証的に描かれている。

昭和初期の保育内容研究において、「遊戲」は中核に位置づけられており、関西聯合保育会大会では「幼児を心から喜ばせ、その発達を促してこそ〈遊戲〉の目的が果たせる」（129頁）として律動遊戲の幅広い追求がみられた（第5章）という。

第6章では、明治後期から昭和初期にかけての自然保育の具体的展開について取り上げている。これまでも、例えば明石女子師範学校附属幼稚園では、保育日誌から1907（明治40）年度を契機に「一転して外遊中心の実践になっている」と読み取り、恩物中心から「幼児の自発的遊戲を重視した内容」に変化していると指摘した研究（杉浦英樹、2009年）をはじめ、明治40年前後から自然にふれあう保育や幼児の自由な活動を尊重する保育の急激な広がりがみられることは多くの研究によって指摘されている。『日本帝国文部省第三十七年報』（明治44年6月刊）に、幼稚園の園数、園児数の増加のみならず「幼児保育ノ方法モ亦研究改善ヲ加ヘラルルニ至レリ」（107頁）と記されているのも、勿論恩物脱却の動きを掌握してのことであろう。本書では、「自然物おもちゃ」の成立過程に焦点をあて、上記のような先行研究より一歩踏み込んで保姆たちの現場における試行錯誤の息づかいを描き出そうとしている。

また、個人的には、それまで自由遊戲としてとらえられていた自然と関わる活動が、幼稚園令の項目「観察」によって、「自然物観察」と「自然物応用手技」とに分けて位置づけられ、自然観察が自覚的に行われるようになったという成田幼稚園の事例に興味をいだいた。幼稚園令の項目化とその狭義の解釈により、自然保育の自由な発展に抑圧的力が働いたとも考えられるからである。

第III部では、「昭和初期の幼稚園における保育実践の到達点とその特質について、保育カリキュラムの構造や保育実践形態に焦点を当てて検討」し、幼稚園関係者間の議論をうけて、保姆たちが保育項目の羅列主義の克服にむけて取り組み始めたことを指摘している。具体的には、これまでの先行研究による知見をさらに実践と往還させて以下の点が示されている。

アメリカの国際幼稚園連盟（IKU）作成の「幼稚園カリキュラム」（1919年）の翻訳・紹介（1924年）によって「幼児の生活に根ざした〈主題〉を中核に位置づけたカリキュラムの編成原理」（166頁）がもたらされたことが、項目羅列主義改善の契機としての示唆となった（第7章）こと。

さらに、日本で最初の本格的な保育カリキュラムとされる『系統的保育案の実際』（1935年）されたことにより、羅列主義的発想からの脱却と科学的視点、系統的思考がみられるようになった（第8章）こと。特に、大正末期から昭和初期にかけての関西聯合保育会では、幼児をよく観察することや調査研究による科学性、客観性を根拠に保育方法の標準化を図ろうとしたこと。同時に「幼児のありのままの行動」を精密に観察し、「幼児そのものの個性」や発達状況に応じた個別的指導の具体化をめざしたということは、筆者も指摘しているように、この時期から保育現場では「自然な生活を通して幼児の個性が総合的に捉えられるようになった」という点で着目できよう。

「誘導保育案」などの幼稚園カリキュラム構造の分析は、教育全体の変遷・変容を俯瞰して理論付けるためには歴史研究としてもその意義はいうまでもないが、本書ではあくまでも実践を基軸としておれずに、明治後期から昭和初期にかけて、保姆たちがいかに幼児の「自己充実」と「生活の発展」という本質論をふまえながらも幼児の興味に適した保育内容・方法を模索していったのかということに焦点化した展開（第8章）となっている。

以上の知見によって、明治期後半から昭和初期という日本の幼稚園教育の「近代」は、心理学等の専門的知識の導入によって、当初形式的に移入された幼稚園教育の内容・方法が、保姆たちの自覚的努力によって成熟していく段階として捉えられるだろう。

加えて本書によってもたらされたものとして、実践的方法論を指摘したい。保育の日誌や実践記録は日本の保育現場においては日々の保育の質を深化発展させるための主たる資料とされており、そもそも実践的特質を有する保育の研究には欠かせない素材であるにもかかわらず、幼児教育史の分野では、史料として活用する方法論はいまだ確立しているとはいいがたい。同時に、幼児教育史

の領域に限らず、教育史の主流が長らく制度や言説研究であったこと、そしてそのことを自覚的に捉えるがゆえに子どもと教師が織りなす実践史ならではの生きた教育理論を見いだそうとする試みが本研究に限らずなされてきたことはいうまでもない。しかし、日々のありのままを詳細に記録する日誌の類の史料に入り込むと、個別事例に囚われ俯瞰した見方を遠ざける傾向も否定できない。その意味では、本研究によって、保育実践記録を理論構築のためのエビデンスとして用いるひとつの方法論が示されたといえよう。それは、日誌等の実践記録の徹底した丁寧な読み取りと、その個別事例を時代のマトリックスの中でどのように位置づけるかの双方によって説得力を発揮する。

集めた史料や事象をすべて集計、呈示する一方でそこから見えてくるものが明確とはいえない研究も多い中で、本研究はストイックに史料が取捨選択されており、ゆえに論理がゆるぎなくかつ無駄のない実証性をもって構築されている。読後感としてストンと気持ちよく理解できるのも丁寧で緻密な史料の探求と削ぎ落としがあればこそである。

結章において、筆者は本書が「各地で中核的な役割を果たした公立幼稚園を中心に」取り上げたことについて自覚的に述べている。研究対象とされた時期は丁度数においては私立に凌駕されていく時期（園数において私立が公立を凌駕するのは1909年、園児数では1926年）ではあるものの、保育の質を主にリードした各地の公立園を取り上げたことは、保育実践形態の特質を抽出するためにはむしろ的確である。今後の課題とされている設置者が異なる園においては、個別化された文脈が予想されるからである。

如上で述べたように、本書によってもたらされた知見は多く、幼児教育についての歴史研究を志す者にとって指南書ともいうべき労作であることは間違いないが、以下気になったことを少し申し上げたい。

「観察」は本来、「人間社会および自然界のあらゆる事物を対象とし、他の領域を統括するもの」（168頁）として捉えられており、「幼稚園教育要項」においては、倉橋の意見を参考に「自然界及び社会生活の直観をなさしむ」と記されているなど「生活全体を通して行うことで合意がなされた」というが、著者も指摘しているように、また

前述の成田幼稚園の事例にもあるように幼稚園令において保育項目のひとつとして列挙され、主に自然観察に矮小化されていくのはどうしてなのか。この点については指摘にとどまっているため、その事由についての検討を期待したい。さらに細かいことだが、168頁に倉橋の「観察」理念の根拠として挙げている「幼稚園令の読み方」は当然幼稚園令発布後の掲載文であるが、169頁の文章展開では「その後、幼稚園令案の起草、制定作業が進められ」たとされており、時系列的に読みづらくなっている。

また、本著でも取りあげているアメリカの「幼稚園カリキュラム」の翻訳を依頼した倉橋惣三が、アメリカ教育界の「教育目的の個人価値から社会価値への変化」という転換を日本に紹介し、デューイやキルパトリックに依りながら社会的生活の重視を提起したことを、筆者の師である湯川嘉津美氏が指摘しているが、この提起は実践に反映し変化をもたらしていったのか否か。

本書に続く個別事例分析の蓄積によってさらに俯瞰した系統的研究にすること、および法制度史との往還的視点による実践史研究のさらなる発展を期待したい。

(学術出版会刊 2012年5月発行 A5判 218頁 本体価格4,800円)

関 啓子 著

『コーカサスと中央アジアの人間形成 発達文化の比較教育研究』

嶺井 明子 (筑波大学)

コーカサスと中央アジア、これらはシルクロードを連想させ、何かしら人を魅了する響きをもっている。しかし、これらの地域の教育研究は日本では手薄であり、教育改革やそこで繰り広げられる人間形成のありようについて、これまで紹介、研究されることは少なかった。

この人間形成のありようの解明、ソ連邦から独立後、どのような教育改革が行われ、発達文化がどのように変容しているかとの問いに取り組んだのが「発達文化の比較教育研究」を副題とする本書である。これらの国々の「独立後の教育改革を考察し、国家建設のあり方と不可分の関係にある

人材養成（人づくり）政策の実態および人々の人間形成のありようを調べ」、「従来の教育の近代化とは異なる側面があるのか、ないのかを検討」という課題意識に基づいている。ここには①人類史上初となるグローバリゼーションの下での国民教育制度の制度化の特徴を浮き彫りにすること、②「ソヴェト教育」を総括し、光と影を明らかにすること、③中央アジアとコーカサスという異なる文化圏の教育比較をすることが含意されている。

考察の対象は旧ソ連邦を構成していた諸国であり、コーカサスについてはアルメニア、アゼルバイジャン、グルジアを、中央アジアについてはカザフスタン、クルグズスタン、ウズベキスタンを取りあげている。

著者はソビエト教育学の理念・思想的基盤を築いた H. K. クループスカヤの思想研究からスタートし、長年にわたりソ連、ロシアの教育・文化・社会を調査研究してきており、「教育思想史、比較教育学、環境教育」が専門である。その著者が一橋大学を退職する際に完成させたのが本書であり、著者いわく「正規教員としての一卒業論文」（あとがき）である。これまでの研究の集大成という意味であろうか。著者の生き方の「仕切り」の潔さが伝わってくる。

本書の構成

本書の構成は以下の通りである。補論では「人の育ちという日常世界を大きく抱え込んでいるもの」を取り上げており、「補論2」は岡田進氏が執筆している。

はしがき

序章 第一節 課題意識

第二節 先行研究の検討

第三節 分析枠組みをめぐる問い

第四節 研究方法

第五節 構成

第一章コーカサスと中央アジアの独立—国づくり

第一節 ソ連邦からの独立

第二節 グローバル化のもとの独立

第三節 独立記念日の祝い方

—メキシコとクルグスタンの比較—

第二章 コーカサスと中央アジアの教育改革

第一節 コーカサスと中央アジアの教育改革

第二節 コーカサスの教育改革